

## 自己評価報告書

平成23年 4月 1日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2012

課題番号：20520353

研究課題名(和文)音韻障害と外国語訛りの平行性に関する言語学的研究

研究課題名(英文) A linguistic study on parallelism between phonological disorders and foreign accents

研究代表者

上田 功 (UEDA ISAO)

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：50176583

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：音声学、音韻論、言語障害、機能性構音障害、外国語習得、外国語訛り

## 1. 研究計画の概要

本研究は、幼児の音韻障害と、成人のいわゆる外国人訛りを比較し、その共通点と相違点を明らかにすることによって、人間の音韻獲得のメカニズムの本質に迫ろうとするものである。そして、その研究成果を、いわば相互乗り入れの形で、双方の治療や教育に利用し、臨床面に裨益することを目的とする。さらに理論面では、音韻障害と外国語訛りを音韻理論によって分析し、その規則性を洗い出し、両者の体系を比較・対照することによって、人間が獲得可能な音韻体系とはどのようなものであるか、獲得に課される制約にはどのようなものがあるかを明らかにして、人間の音韻獲得の普遍性に迫ろうとするものである。最終的には、現状に見られる理論的研究面と臨床教育面での大きなギャップが、少しでも埋まることが期待される。

## 2. 研究の進捗状況

現在までは、事例研究を中心に、音韻障害と外国語訛りの研究を別々におこなってきた。音韻障害に関しては、幼児の機能性構音障害に関して、これまで収集した事例の中から、興味深いものを選んで分析している。そのなかの最も珍しいケースは、後舌の円唇母音が、両唇鼻音として具現化する事例であるが、これは音響音声学的・音韻論的視点から総合的に分析し、ノルウェーのオスロで開催された、国際臨床音声学・言語学学会第13回大会で発表し、貴重なフィードバックをいただいている。また他の事例も、主として音韻論的分析をおこない、口蓋化、声門閉鎖音化、促音化、流音の阻害音化、歯擦音の閉鎖音化等、機能性構音障害の典型的なタイプを、最適性理論により分析中である。

外国語訛りに関しては、日本人英語学習者

のプロソディーに見られる問題点を継続して考察してきている。特に重点を置いているのは、上級の学習者にも根強く残る日本語訛りである、主調子配置に関する問題である。この問題に関しては、すでに2つの国際会議で研究発表をおこなっており、これらの学会で得たコメントや批判を組み込み、何本かの論文となっている。特に考察の対象としているのが、学習者の音韻能力であり、これを被験者の知識と産出の2点で類型化し、歳出、知識ともに獲得している者、知識はあるが、誤った産出をおこなう者、逆に産出は正しいが、知識が誤っている者、そしてどちらも誤っている者、以上の4タイプに類型化できることを立証した。

## 3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

(理由)

音韻障害と外国語訛りのどちらについても、これまでの分析結果報告が、幸いにも多くの国際学会の口頭発表やジャーナルに採択され、内外のかなりの数の研究者からいただいたコメントが非常に役だったのが、主たる理由である。

## 4. 今後の研究の推進方策

これまで音韻障害と外国語訛りを別々に考察してきたが、今後は両者の共通点と相違点を理論的に、比較検討せねばならない。採用すべき音韻理論としては、最適性理論を予定している。

また幼児の機能性構音障害に関しては、さらに多種多様な障害事例のデータ収集と分析が望まれるし、外国語訛りに関しては、誤った語に典型的な卓立を与えながら、正しい主調子配置を見せる、いわば「ハイブリッドタイプ

」ともいふべき事例を分析する。特に音韻面と統語面のインターフェイスという可能性を探る必要があるし、プロソディックな現象だけではなく、分節音に関する誤りも分析対象とする計画である。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計1件)

①上田 功「音韻理論と構音障害」『音声研究』12.3 査読あり 3-16. 2008.

##### [学会発表](計6件)

①上田 功「音韻獲得、音韻障害、そして音韻理論」第13回認知神経心理学研究会 東京学芸大学 2010年 8月 7日.

②Ueda, Isao. An idiosyncratic vowel disorder in Japanese. The 13<sup>th</sup> meeting of the International Clinical Phonetics and Linguistic Association, Oslo, Norway, 2010 12月15日.

##### [図書](計2件)

①Ueda, Isao and Hiroko Saito. The interface between phonology, pragmatics and syntax in nuclear stress misplacement. In Iverson, M. et al. (eds.) *Proceedings of the 2009 Mind/Context Divide Workshop*. pp.116-122. Cascadilla Press 2010.

②上田 功「言語聴覚士のための臨床音韻分析:言語学からみた基本的留意点」『音声言語の研究』12.3 1-15. 大阪大学大学院言語文化研究科 2009.